
僕と君と暴言と

如月二日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と君と暴言と

【Nコード】

N8423V

【作者名】

如月二日

【あらすじ】

ラブコメだと思います

「四度、死んでくれない？」
「いつか死ぬなら今死ねば？」
「もういいって、あんたが呼吸してるって事実は」
「本当に私と同じ人間なの？」
「ああ、ごめん。あんたの言語、ちょっと国違うみたい」
「栄養？あんたに必要？」
「なんであんたはここに分子の結合体として存在しているのかしら？世の中って不思議よね。早くバクテリアにでも分解されてしまえばいいのに。それはもう、あつという間に。事も無げに」
「気が悪い。あんたを見ると非常に気が悪い」
「勘違いしないでね。気持ち悪いじゃないから。気が悪い、だから」
「鳥肌立つ。以上」
「ストレス？ああ、あんたの事ね」
「え？日本国籍……ていうか、地球籍だったの？」
「溜め息以下」
「もうよくない？まだ、生きる？」
「ちよつと！何、道行く女の子観察してんのよ！相手が可哀相でしょ！ああ、だからって、私だけを見てなさいよ的な、ツンデレ・ヤンデレ的フォローはないわよ。私も見ないで頂戴。……………そうね、肥溜めに集る蠅でも見てればいいんじゃない」
「触るな。障るな」
「嫌いじゃないけど、無性に存在を否定したいのよね」
「うわ……。うわー…………」
「そろそろ……ね（なぜか空を指す）」
「手伝おうか？刑務所に入りたいんだよね？」
「消えろとは言わないわ。消えてみて」
「できないの？はん。何の為の存在よ」

「はいはい。あ、ポツキー折れた。死ねばいいのに」

「なぜか、あんた見た見るとき焦点合わないのよね」

……… ああ、驚かせてすまない。

突然の生死を脅かすような言葉の暴力の羅列に、正直ドン引いてしまったことだろう。

うん。それは非常に仕方のないことで、これ以上なく、それは必然だと思う。

だって、今見返しただけでも、まじで、冗談抜きで、殺意覚えるもん。殺意しか湧かねえもん。ん？いや、そこまでじゃないって？ああ、そう、そうなのか。

ならいいんだ。ただ、少しでもこの憤りを共感して欲しくてね。

羅列したまでのこと。それ以上でもそれ以下でもないから大丈夫だ。で、まあ、これらの文句が誰に向けられたものかと言うと、もうお気づきだと思うが、俺自身、つまりは大神真司おおかみ しんじである、俺に向けてのものである。

では、その俺に向けられた文句が誰から送られているのかと言うと、それは今現在、俺の隣で不機嫌そうな顔で、つまりは眉間に皺を寄せ、殺意たつぷり、殺意しかありませんよ、といった感じの目で俺を睨み付けてくる、小神望こがみのぞみから向けられたものである。

ちよつと、モノローグを一旦止めて、不機嫌盛りまっしぐらの望に話をかけたいと思う。暫し、待っていてくれ。

「なあ、ごめんて」

「そうね。軽く溝に頭から沈んでくれれば許す」

早くもモノローグにただいま。ここは温かいね。

話しかけなきゃよかった。まじで。心に十のダメージを負いました。少ない？まあ、十

年近くこの暴言を浴びせられている俺にしてみれば、これくらいの軽口は何てことはない。全然、全くもって、常識の範囲内だ。

「だからごめんて。本当にごめん。……って、俺何もしてなくない？」

「してなくなくなーい……ふ、現代人が抱える闇よね」

「あい、ちきしょう！」

「日本語はあなたには難しい、ううん、声帯を震わせるという行為自体が困難なのね」

「ちげえよ！全然ちげえよ！」

さて、この会話に到るまでに何があつたのか説明しよう。……結論を言ってしまうえば、何もなかった。

なぜなら、今日の朝、つまりは登校時、運悪くバツティングしてしまい、「なあ、ごめんて」と言う会話から俺と望の一日はスタートしているからである。

ではなぜ俺が謝つたのか。それは何となく、である。それ以外に何も無いし、それ以内にもない。単に、望が不機嫌そうな顔をこちらに向けていたので謝っただけ。ただ、それだけ。

でも、昔からこういう主従関係よろしくな関係性だったわけではない。だって、それはもう昔の望は得も言われぬほど可愛くて可憐で純情で純白で、文句や悪口などとは程遠く、お姫様のような雰囲気醸し出していたからである。

ああ、本当にあの頃の望に戻って欲しいもんだ。いつからこんな歪んだ関係になっちまったんだろうな？切な過ぎるぜ。この野郎。という、俺の妄想。

そう、妄想。

全ては、妄想。

イエス、妄想。

「何、妄想の中で理想の私像もとい、私との思い出捏造してんのよ。脳、つるつるなんじゃないの？」

「はっはー。もうつるつるでもなんでもきやがれ」

「二酸化炭素撒き散らして、地球温暖化にしか貢献できないあんたって、本当に無能、いえ、有害よね。有害指定図書よね」

「ちよつと待て！さすがに今のは聞き捨てならねえ。俺は確かに二酸化炭素をもれなく放出しているが、小中学生に対してまで有害さ

を振りまいた覚えはねえよ！むしろそこは確実に無害無害の大神無害様だよ！」

と、熱く、最後の方はよくわからない（寒い）突っ込みをした俺だが、そんな俺を尻目に、冷静極まりない望は、道路を挟んで向かい側の歩道を指差していた。

[illegible]

そして、俺の視線に気づいた二人はそのまま、凄まじい早足で俺の視界からフェードアウトしていった。

「ぐっふー！ もれなく有害指定図書だぜこの野郎！」

見事に認定されました。

「これで私の視界からも消えてくれるのね」

「諦めません、死ぬまでは」

「じゃあ、死ね」

「ひゃん！」

朝から騒々しい騒々しい。まあでも、さつきも言ったとおり、これくらいは日常茶飯事。

そして、この関係は俺と望が会ってから十年近く続いている関係でもある。

そう、出会った瞬間から続いている関係。

出会った瞬間から、ってことは、つまりは、目と目を合わせてさあこれから自己紹介しよう、というタイミングから始まっているわけだ。

ふふふ。懐かしいな。あれは小学校での入学式の日。

「はい。皆さん、こんにちわ。みんなは今日から小学生です。ま
ごうことなく小学生です。友達百人できるかどうかは、この熾烈な
友達できるかな争いを勝ち抜いた者にのみわかることです。そうで

ない人は、早めに脱落しましょうね」

入学式の日。

いよいよ今日から待ちに待った小学生なんだという、張り裂けんばかりの期待感と、少しばかりの緊張感の中、俺は自分が配属された一年三組の教室の一番後ろ且つ窓際の席に座っていた。

あ、先生の挨拶はよく思い出せないもので、少しばかり、本当に少しだけ、俺の妄想も混じり込んでいます。

「せっかくなので、まずはお隣の人に挨拶をしましょう。これから先、何年間もいい友達として付き合っていけるよう、細心の注意と敬意を込めて挨拶をしてください」

そんな先生の促しとともに、クラスの中は挨拶の声で一気に埋め尽くされていった。

よし、俺も頑張るぞ。無駄に意気込んで隣を向くと、そこには俺の心をがっちり掴んで掴みすぎて潰れてしまふんじゃないかというほど、可愛い、それはもう可愛い女の子が座っていた。

思わず見蕩れてしまう。

そんな俺の視線に気づいたのか、女の子（女神）はこちらを向いて「これからよろしくね。私は小神望。きつと、君よりも人としてのヒエラルキーは圧倒的に上だから、あんまり話しかけてこないでね」と、天使の微笑みなんて・・・以下だな、と思わせるほどのスマイルを向けてきなすったのだ。

「ああ、うん。よろしくね。僕は大神真司っていうんだ」

とりあえず、緊張しながらも、俺は挨拶を返した。ただ、一つ、ここで過ちがあつたとするならば、それは彼女が発した挨拶の後半部分を理解できていなかったことだろう。

わかるわけないじゃん！ヒエラルキーって。小学一年生が使う言葉じゃねえよ！

思うわけないじゃん！まさか初っ端から拒否されるなんて！

と言うわけで、彼女の今思えば、吐き気しか催さないような挨拶に対して、普通の返事をしてしまった俺に返ってきた言葉は

「そう、日本語、苦手なのね。このペド野郎」

「うん！まだ平仮名とかちゃんと書けないんだ」

もしこの頃に戻るなら一言、自分にアドバイスを送りたい。

頼むから、それ以上望に話しかけるな。周りにはもつと可愛い子も大勢いるんだ。もつと周囲を見てくれ。お願いだ。お願いします。いやもう、本当に頼みます、と。

最後のほうが、ただの願望みたいになっちゃったことは流して欲しい。

そんなこんなで、この日から、俺と望の関係は始まったわけだ。

まあ、もともと、望の俺に対しての文句というか、死の呪文は、年齢の割に言葉のチョイスが甚だ不適なものであったため、俺自身、その意味を理解し始めたのはそれから三年以上後のことである。

その頃には既に手遅れと言っかなんというか。長年、望の文句に曝され続けた俺は、もはや、それ抜きでは生きていけないような、超どM体質へと構造転換をされていたわけ。

それに望は、実は俺だけじゃなく、誰彼構わず、話しかけられると文句を浴びせてしまう困ったちゃん、余程寛容な奴が、俺みたいに体の芯から、心から、それ抜きでは生きていけないように改造されてしまった奴しか、本当に可哀相な奴しか側にいないのである。ちなみに、俺の初恋とも言っべき恋心も、自然と消え去ってしまった。

ん？殺意覚えるって言っただくせにつて？それも含めて日常のスパイスなんだよ。

まあ、だからと言って、俺は同情心で望と一緒にいるわけではないし、周りにもそういう風に思っただくせない。

どM体質に転換されてたこともあるけれど、それ以上に、やっぱり十年近く一緒にいる友達、どんな奴であれ、やっぱり友達なんだ。それ以上でも、それ以下でもない。

と、少し臭いことも言っってしまったことを後悔しつつ、過去の話

はここまでにして、話を進めていきたいと思う。

「しかし、もう季節は夏だよな。暑くてやばいな」

望とバツティングし、意味もなく謝り、罵られ、小学生に軽蔑された後、一緒に歩く学校までの道のり。

季節は夏に向かってまっしぐらの六月下旬。

少しずつ蝉の鳴き声も聞こえ始めるそんな時期。

既に学校の制服は半袖仕様にはなっているものの、それでもやっぱり暑いものは暑い。我慢できる程度ではあるが、口から文句が漏れてしまう程度でもある。

汗もほんのりと額に滲む。

そんな俺の情けない様に

「本当にあんたは我慢が足りないわねえ。だから、あんたの周りには蠅が集るのよ。ああ別にあんたの体臭が臭いとかいうわけじゃないわよ。なんというか、あんたの雰囲気臭いのよ」

と辛辣な言葉を浴びせかけてくる望。

「どんなだよ！」

思い切り体を振る俺。

俺のリアクション途中で欠伸をする望。

端から見れば、夫婦漫才チックにも見えなくはないだろうが、当の本人、俺と望がそう感じていないので、そうではない。あくまで友達の距離感での関係だ。

よく、友達からは

『お前ら付き合ってんじゃねえの?』

と、思春期全開の質問を受けるが、そんな事実は毛ほども存在していないので、はっきりと付き合っていない事を伝えるのだが、そうしたらそうしたで、質問者はかなり、凄まじく納得したように頷きながら

『お前が単にMなだけか』

と、快活な笑顔でそう言ったのけるのだった。いや、確かにMな

ことは今更否定はできないし、するつもりはないけど、凄まじく納得の境地に達したような笑顔を向けられると、なんとなく気分はモヤモヤするんだよね。

だいたい、望が本気で俺の事を罵ってしるなら、たぶん、俺はもう側にはいないはずだ。

望の言葉には悪意はない。あまりない。そこそこない。もう本当に少し、いや過分に……ある。

それはいいんだ。別にいいんだ。重要な事はだ、俺にしてみれば、この関係が、たまに苛々したり、無性に殺意を覚えたりするけど、それでも、心地いいものであるということだ。

というわけで、無理やりまとめさせてもらったが、今現在、俺はこんな感じの生活を送っている、というわけだ。

以上。説明終わり。

放課後。

いつものように帰ろうとした俺は、ここで再び望とバツティングした。というわけではなく、それとなく、いつも一緒に帰ることが習慣づいているため、クラスは違えど、いや、違うからこそ、お互いに相手が下駄箱に来るまで待つことが当たり前になってしまっている。実は、朝も（嘯いてごめんなさい）。

これも周りから夫婦に見られる原因なんだろうけど。

ちなみに今日は俺が待つ番で、下駄箱に着いてから五分後に望がやって来た。

「よし、じゃあ帰りますか」

いつものようにテンション上げ気味の俺だったのだが、望はいつも通りじゃないようだ。

普段なら、無駄にテンションを上げる俺に対して、痛烈な皮肉を言ってくるのだが、今日は何故か

「……………」

無言のまま歩き出してしまった。

「あ、おい。ちょっと待ってくれよ」

慌てて靴に履き替え、望の後を追う。その間も、彼女は一切歩く速度を落とすことなく、むしろちよつとばかり上げ気味に歩いていく。

「おい。どうしたんだよ？」

直ぐに望に追いついた俺は不服感たつぷりに話しかける。

「何でもない。たまには、そういうこともあるわよ。何というか…

…あんたの存在認識をし忘れてしまっていた的な？」

「今まででワーストテンに入るぞ今の台詞」

「私の中ではどれもナンバーワン」

「むしろかつこいい！」

くつ。思わず惚れちまいそうだったぜ。危ない危ない。

——にしても、やっぱり、どこか変だよな。今日の、ていうか、今の望は。

何か、引っかかる。絶対におかしい。

だって、手と足が同時出てんだもん。

「おい」

「何よ、寄生虫の心臓」

「斬新過ぎて、リアクションし辛い。……じゃなくて、手と足、同時に出てんぞ」

「気のせいよ」

むむ、やっぱりおかしい。いつもなら、連続射撃と言わんばかりに辛辣な言葉が俺に浴びせかけられるはずなのに。

なのに、どうした？望ともあるう者が、普通の台詞で満足してしまっなんて。あつてはならないことだ。

「何かお前、おかしくないか？」

「何がよ？」

「だって、今日の朝まではあんなに絶好調に思わず俺の口から嗚咽

が漏れてもおかしくないような言葉投げてきてたのに、今だって『何がよ』しか言ってるねえじゃん。熱でも出たのか？」

しかし、そんな俺の心配を他所に、望は再び無言のまま、先へと歩いていく。

「だから、待って」

つい勢いで肩を掴んでしまった俺。

望はそんな俺を振り返りざまに睨み付けてきた。無言で。しっかりと無言で。口を真一文字に結んで。睨み付けてきた。

「……っ。何だよ、何でそんな目をすんだよ」

望の今までに見たことのない目に、思わず怯んでしまう。

「……」

「何でも言わないんだよ」

しかして、望の口は開かれることなく、ただ、嫌な無音状態が二人の間を埋め尽くしていった。

「くっそ！何か言えよ」

「……」

明らかに俺がイラついている事がわかってるだろうに、それでもいつも勝手に開いて俺への文句が溢れ出してくる望の口が開くことはなかった。

「わかった。もういい。先に帰る」

何も喋らなくなってしまうた望を置いて、俺は家に向かって駆け出した。

物凄く苛々した。

物凄く腹立たしかった。

何も喋らない望が。

こんなにも簡単に苛々してしまう自分が。

物凄く、嫌だった。

「だーくっそ！まじで苛々する！」

帰宅後。

我が家のリビング。

苛々がもうどうにも止まらない俺は、リビングにあるソファの上で、うねうねと体を動かしている。

本当ならクッションとか投げてストレス発散したいところだけど、後で母さんに怒られるのは嫌だし。

残念ながら、俺のM体質は無駄に望限定なんだよ。

って、思い出した！また、鮮明に無言の望、思い出した。

まじであいつ何なんだよ！

あんな冷たい目しやがって。あんなに冷たい言葉吐きやがって。まじむかつく。

だーもう、苛々止まらねえ！

「ただいまー」

そんなうじうじうねうねくねくねしているところで、我が妹、帰宅。

「何うねぐにしてんの？ちょっとさすがの妹でもそれは引いちゃうよ？」

俺の奇行を見た妹こと可憐^{かれん}は訝しげに目を細め、兄に対しての軽蔑の言葉を、それはもうあっさりと発してきました。

「引くな引くな。これにはちゃんとしたわけがあるんだからな」

「わけがあつたとしても、その動きはまじでやばいよ」

「まじか？」

「まじだ」

妹からの適切且つ的確なアドバイスを頂いた俺は、うねぐにな動きを即座に止め、一般的な座り方へと修正を加えた。

「で、そんな動きをするまでにお兄ちゃんを駆り立てたのは何なの？」

可憐が心配そうな顔をしながら横に座ってきた。

なんともまあ、兄思いな妹だこと。

「うん、まあ実はな……」

そんな兄思いの妹の気持ちに応えるべく、先ほどまでの奇妙奇天烈な動きの原因である、下校中の出来事について切々と、語った。

「ふーん。なるほどねえ」

事情を聞き終えた可憐は、少しばかり考え込むように唇を尖らせながら、人差し指をこめかみに当てている。

ああ、ちなみに、望も可憐も顔見知りというか、友達というか、かなり仲がいい。それはもう、二人して俺を嬉々として罵るほどに。昔は可憐もその名の通り、可憐で優しい子だったのになあ。つて、いや、今も十分に、こんな甲斐性なしの兄の相談を真摯に聞いてくれるくらいにいい子なんだけれども。

「な？俺が苛々するのもわかるだろ？せつかくこつちが心配してんのに、無視だぜ？いつもみたいに暴言を浴びせるでもなく、無視だぜ？」

「今はお兄ちゃんのだMアピールはいらないよ？」

「してねえよ！」

「冗談はいいとして……」

どうだろうねえ、これ、私がどうのこうの言う問題でもなしなあ、と独り言のように呟いた後

「とにかく、望は悪くない」

断言してきた。

「え、それって、望贖罪じゃ……」

「でも、お兄ちゃんも悪くない」

加えて断言してきた。

「喧嘩両成敗ってやつか？」

何とも公平な妹なこと。

「ううん、そういうわけじゃないんだけど、ね」

うーん、と多少言葉を選ぶように目を泳がせた後

「強いて言うなら、お兄ちゃんも望もお互いの事を知るべきなんだ

よ」

「知ってるさ。あいつと俺はもう十年近い付き合いなんだぞ。しかも、ほぼマンツーマンで。知らないことなんてないさ」

今更、あいつについて知らないことがあるって自体が奇跡に等しい。

あいつの好きな物・嫌いな物はもちろんのこと、それを好きになった経緯や嫌いになった原因まで知ってる。

他にもプライバシーなんてあったもんじゃない、ってくらい望の事は知り尽くしているつもりだ。

これ以上、何を知れってんだ。

とまあ、そんな感じの事を、さらに可憐にぶつけると

「うーん、そういうことじゃないというか……………そういう部分じゃないというか……………」

これまた、何とも歯切れの悪い返事を返してきた。

どうやら、可愛い可愛い妹を困らせてしまったみたいだ。兄として情け限りである。

「すまん。変なこと相談したせいで困らせちゃったみたいだな。もう、大丈夫。後は自分で何とかすっからよ」

そこまで言って、俺は立ち上がり、リビングを出ると、そのままの足で二階にある自分の部屋へと向かって行った。

可憐が何か言いたげな顔をしていたが、これ以上、困らせるのもあれだなと思い、あえての無視をした。

翌日。

結局、苛々が収まることなく迎えた朝。

普段どおりに登校をした俺は、普段どおりに望にバッティングすることはなかった。クラスが違うこともあり、学校内ではほとんど会うこともない。

そして、そのまま迎えた放課後。
下駄箱。

朝と同じように、そこで望と会うことはなかった。
もやもやが、止まらなかった。

何か俺が悪いことしたのか？

何か気に障るようなことでもしたのか？

いつも通りのはずだっただろ？

なんなんだよ、一体。

さらに翌日。

土曜日。

つまりは休日。

部活に入っていない俺は土曜日曜と完璧なフリータイムである。

というわけで、昨日一昨日の不満等を解消すべく、俺は一人、街中へと出かけることにした。

時刻は午前十時。

「お兄ちゃん、お出かけかい？」

玄関でどの靴を履こうか迷っていると、後ろから妹の声が聞こえてきた。

「おう、お出かけだとも。休みの日は一人散歩に限る」

振り向く事無く返答。よし、今日はシックにコンバースのブラックで行くか。

靴箱から取り出し、早速履いてみる。うん。似合うぜ、ブラック。一人散歩って。定年退職後に、今までの仕事人間な生活から急に暇になって、でも、だからって家に居たら居たで奥さんにぶつぶつ文句を言われてしまう。だから、とりあえずは健康維持の意味も込めて散歩でも始めますか、って言い始めたご老人みたいなこと言わないでよ」

「長えよ、例え。休日の朝から俺にキレのあるツツコミを求めないでくれ」

靴を履き、気分が若干高揚してきた俺に、背後から長々とテンションが下がるようなボケをかましてくる可憐。

朝からお前の頭は回転し過ぎだ。少しは脳を休めるということを知れ。

「何言ってるの？お兄ちゃんのツツコミ、いつもワンパターンじゃん」

「くふう。いじめだ」

飛び出しました。

妹の手厳しい俺批判に耐えかねた俺は、溢れてもいない涙を拭いながら、家から飛び出していきました。

「んー、やっぱり、休日の散歩はいいねえ」

家から飛び出して、現在、街中。

暑い暑いと言いながらも、散歩をしてしまうあたり、いよいよ俺は芯からのMなんじゃないのかと疑念を抱きつつも、まあそこはさして重要ではない。

今、重要なのは、この苛々を誤魔化すことができているという事実だ。なぜ、望が急に俺を無視するような態度を取り、十年近く続いていた二人での登下校を断絶してしまったのかはわからないし、それに対して、自分がこうも苛々してしまうのもわからん。

だけど、そんなもやもやを吹き飛ばしてくれる物がこの街中には存在しているんだ。

おおっと、早速目に映りこんできちまったぜ。

こりゃ行くしかねえよな。

視界に入ってきた、心を揺さ振るものへと惹きつけられるように、俺の足は自然と動いていった。

そして、いつもの決まり文句を一つ。

「モンブランケーキ、ください」

そう、俺の趣味は、もとい、大好物はモンブランケーキ。

休日ともなれば、街中に繰り出し、様々なモンブランケーキを食べ歩く。

これ以上のストレス解消方はないね。

「はい。いつもお買い上げありがとうございます」

店員さんも既に俺の顔は記憶済み。たまにおまけをくれたりもする。ふふふ。まさにこの町のモンブランケーキは俺の手中にあると言っても過言ではないな。

というわけで、いくつかのケーキ屋を渡り歩き、その度にモンブランケーキを買っては食べ、食べては買いを繰り返し、気づけば昼の一時を回っていた。

「ふいー、まじで食った食った」

砂糖の塊と言っても過言ではないモンブランケーキで腹を満たすという、荒業、というか、不健康極まりない所業をやったのけた俺は、暫し休憩のために適当なファーストフード店に入り、これまた砂糖水と言っても間違いではないコーラ（Ｌサイズ）に舌鼓を打っている。

ああ、不健康な休日万歳。

散歩がストレス解消なんて、とんだ大嘘をついたものである。しかし、そこは仕方がない。乙女である妹の前で今日の所業を赤裸々に告白してしまえば

『お兄ちゃんは今、全世界の乙女の頂点である私を敵に回したよ』

なんて意味がよくわからないことを言いながら、全盛期の武蔵並みのミドルキックを繰り出してくるに違いはない。

兄として、そこはソファにでも座りながら

『はっはっは。お前の攻撃では、うまい棒も潰せんわ』

と、妹の攻撃を受け流すくらいの威厳を見せたいものだが、それは無理。だって、あいつ、空手習ってんだもん。

そんなわかりきった出来レースを演じる程、俺もアホではないさ。それに、先にも述べたように、俺のどM体質は望専用なんだよ。

そう、望……………。

「いらんこと思い出した」

モンブランケーキを貪っている時には忘れていた事を思い出してしまい、ブルーが入ってしまった俺。

いや、せつかくの休日なんだ。こうなったら、とことん、日が暮れるまで、モンブランケーキを堪能してやる。

ひねくれた決意を胸に秘め、一気にコーラ（Lサイズ）を飲み干した俺は、多少むせながら、再び町へと繰り出すべく、店を出た。

のだが、

「あれはどうかかな？」

聞こえてきた、聞き覚えのある声。十数年聞いてきた声が、今まさに聞こえてきた。

咄嗟に、声のした方に視線を向けると、そこには見知らぬ男と歩く望の姿があった。

「んー。これは変じゃないか？」

「そうかなあ？」

とあるアクセサリーショップの前で、二人仲良く商品を指差しては、楽しそうに会話を交わしている。

俺には見せたことのない笑顔。

俺には聞かせたことのない声色。

なぜだろう。忘れようとしていたはずのもやもやが、一気に膨れ上がっていくのがわかった。

ああ、あれ？

あれれ？

そういうことだったの？

そういうことだったのか？

だから、だったのか？

だから、俺を無視するような態度を取ったのか？

だから、俺との登下校を拒否したのか？

あー、可憐がお互いの事を知るべきだと言っていたのはこういうことだったのか。

そうかそうか。合点がいったよ。

はは。だよな。望には……………彼氏がいたのか。

だとしたら、いつまでも俺と一緒に登下校したり、話したりするのは変だもんな。

ああ、そうだ。月曜に会ったら謝らないとな。何も知らないくせに、怒ってごめんて。

彼氏がいるのに気づいてあげられなくて、ごめんて。謝らないとな。

気づけば、俺の足は自然と家へと向いていた。

迎えた月曜日。

俺は出来る限り、あたかもそれがいつもの日常であるかのように振舞うべく、いつも通りの七時に起き、七時十五分に朝ごはんを食べ、七時四十五分に家を出た。

「じゃあ、またね。お兄ちゃん」

「おう、気をつけて過ごせよ」

「ういよー」

通う学校の方向が真反対の妹と別れ、俺は一人、学校へと向かう。

「あ、真司」

学校まで半分といったところで、望が突然電柱の影から現れた。何てとこに隠れてやがんだよ。

「おはよう、望」

「あ、あのさ、真司…………」

「ごめんな」

「え？」

この前とは違う、明らかに、俺の中でも違うと意識して発した謝罪の言葉。望もそれを感じ取ったようで、目を丸くしながら押し黙ってしまった。

「本当に、ごめんな」

畳み掛けるように俺はさらに謝罪する。覚悟は決めてきたんだ。しっかりと、謝らないと。

そして、昨日一昨日と、部屋に籠って何度も何度も繰り返した定型文を読み上げる。

「俺知らなかったんだよ。お前に彼氏がいるだなんて。だから、俺とずっと一緒にいるのは困るから、この前は無視したんだよな？だから、登下校、俺に会わないようにしたんだよな？それなのに、勝手に苛々して、大声出してキレて、本当に申し訳ない。いやー、実はさ、昨日見ちゃったんだよ。あ、でも、怒らないでくれよな。本当にたまたまだったんだ。お前と彼氏が町中を歩いているとこ見たのは。うん。俺以外にも、お前の暴言に耐えてくれる奴が見つかったんだな。よかったよかった。稀に見る希少人種だから、簡単に手放すんじゃないぞ。まじで。っと。こんなに話してるとこ、彼氏に見られたらまずいな。というわけで、俺はもう行くわ。たまには俺にも話しかけてくれよな、彼氏ばかりじゃなくて。じゃあ、また」

そこまで一気に喋り、望の反応を見ることなく、俺は学校まで駆けて行った。

「ああ、本当に俺は馬鹿だよな。もっと早く気づいてあげていれば、あいつに無理させることもなかったのにな」

ぶつぶつと漏らす後悔の言葉。しかし、それ以上に漏れてくるのは、涙。

「おいおい。どんだけ俺は後悔してんだよ。まじで。ああもう、これから友達に会うつてのに……。本当に、何でもっと早く気づけなかったんだよ……………」

それから数日。

俺は死んだ魚のように、目を濁しに濁し、死んだ貝のように、自分の殻へと閉じこもった。

それでも、出来る限り望に気を使い、登下校の時間をずらす配慮はした。これ以上、迷惑はかけたくないし。

そんなある日の夕方。

「ただいま」

学校から直帰した俺。玄関の扉を開けると、なぜか妹が、いや可憐様が、背後から阿修羅を出さんばかりのオーラを放ちながら、仁王立ちをされていました。

「おかえりなさい。お兄ちゃん」

「は、はい。ただいま帰りました」

妹の雰囲気気圧されております。兄は今、妹様の雰囲気気圧されています。

「あんた、何をした？」

「うわああああああ！目が、キューピンて。目が、キューピンてなってる。光ってる。これ、殺される。これ、殺される。」

「いや、もういい、もういい」

「何がいの？何がいの？俺の命？俺の存在はもう用済みですか？もうめんどくさい。あんたらめんどくさい。まじで、いい加減、に、せんかい！」

可憐はシャウトしたかと思うと、俺の襟を掴み、一気に外に飛び出していった。

「うっ、うっ、うっ！」

もちろん、襟を掴まれて引きずられる俺の首は絞まりに絞まり、失神寸前。しかし、そんな俺の事にお構いなく、可憐は猛スピードで町中を駆けて行った。

数分後。

「おらよ」

妹はある公園に入ったところで、俺を無造作に投げ捨てた。砂利が体を擦り、鋭い痛みが走る。

「つてえ。何しやがんだよ。しかも、こんなところまで連れてきやがって」

起き上がり辺りを見回すと、そこは昔何度か遊んだことのある公園のようで、設置された遊具に見覚えがあった。

「何でも何もないだろがい。望にあんな酷い事しやがって」

「酷い事？」

「ああ、そうだ。酷い事。……まあ、でも、完全にお兄ちゃんが悪いとは言えないけど。ねえ、望」

「あ、え、望？何でこんなところに？」

可憐の呼びかけに反応するように公園の木の影から出てきたのは、ここ数日見るとこのなかった望その人。突然の望との再開に俺は動揺する。

「私が呼んだのよ」

「へ？可憐が？でもまた何で？」

「いやね、私も数年間、うつん、十年近く、あんたら二人の事見てきたけどさ、今回の事ではっきりわかった。わかりきった。ていうか、呆れ返った。まじに。もう、堪忍袋の緒じゃないけどさ、切れに切れたよ」

冗談抜きで可憐はイラついているようで、片方の眉をひくひくとさせ、ぎりぎりど歯軋りをしている。心なしか、周囲の景色が歪んで見える。

あと一押しすれば、もれなく俺の存在は消されてしまうであろう

ほど、苛々してらっしやる。

「だから、もうここで、私監視の元ではっきりさせることにした。いいわね？お兄ちゃんに望」

未だ状況の掴めない俺はただただ呆然。

「じゃあ、まずはお兄ちゃん。この前、望に何をした？」

「何をしたって、別に何も……」

「ああ？んなわけねえだろ。こんのくそ兄貴が」

ひいひい！マジ怖いマジ怖い。この妹マジ怖い。

あまりの恐ろしさに情けなくも一步後退した俺。

「ああ、まあ別にそれはいいや。もう周知の事実だし。それよりも、望！」

未だ、キュピーンな目をしたままの可憐は望へとキュピーンを向けた。蛇に睨まれた蛙とはまさにこんな感じなんだろう。

望は目を丸くして、完全に固まってしまった。

「あんたもいい加減、いい加減にしなさいよ。もうここで、今すぐに、言え、言ってしまえ！」

「はあ？何を言えつてのよ？まじで大気圏に突入して窒息死しろ」

「だーかーらー、あんたがそんなだから、こんなことになったんじゃない！何年？何年経つのかしら？暴言で誤魔化し続けて」

「死ぬ。可憐、田んぼで溺れて死ぬ」

「まだ言うか。その口は。大概にしろ」

何を言ってるんだ？可憐は？望の暴言は生まれつきかどうかまではわからんけど、確実に望自身を形作るアイデンティティみたいなもんじゃねえか。

それを今さら何キャラ作ってましたみたいに言っただけ？

ナチュラルだよ？望は暴言のナチュラリストだよ？

「おいおい。可憐、何言っただよ？望は出会った瞬間から暴言様だったろ？それを何……」

台詞中断。

再びキュピーンな目は俺へと方向転換。怖い。

「やっぱり、あんたもあんたよ。いい加減気づけ！望が暴言を好きで吐いてると本気で信じてんの？馬鹿じゃない？そんな人間関係破綻者、実際にいるわけないじゃない！世の中に、そんなライトノベルよろしくなキャラがいるわけねえだろ！」

「は？何だよそれ？じゃあ今まで、望は好きでもない暴言吐き続けてきたってのかよ？意味わかんねえ」

混乱していた。困惑していた。

今までの望の暴言がわざとやっていたってどういうことだよ？

何でそんなことしてきたんだよ？

そのせいで、お前、友達作れなかったんじゃないのかよ？

なんで自分の人生、破綻させちまうようなことしてきたんだよ？

意味、わかんねえ。

「望、どういうことだ？可憐の言ってることは本当なのか？だとしたら、何でそんなことしてんだよ？」

俺の問いかけは反応することなく、ただただ、いつもらしくなく、望は下を向いて押し黙って居る。

「望、あんたが言わないなら、もう私が言うよ。正直、もう限界」

苛立ちを隠そうともしない妹の物言いに、望の体が反応する。首が横に揺れる。

「言うから、言うから。自分の口から、きちんと言うから、待って」

薄弱な声。

初めて聞く、声。

初めて鼓膜を揺らす、望の望らしくない、声。

なのに、何故だろう。

そこに嘘は一つも感じられなかった。

「真司。私は、私は……………」

顔を上げた望は、どうしようもなく、どうしようもないほど……………。

むかしむかしのお話です。

とある町に暮らしていた女の子は、七歳を迎えた年の春、小学校に入学を致しました。

わくわく。どきどき。

そんな単調でありきたりな擬音語では言い表せないほど、少女は緊張と期待を胸に躍らせながら、新しい生活への一步を踏み出したのです。

『えー、それでは皆さん、お友達をたくさん作り、楽しい楽しい小学校生活を送って下さい』

そんな締め言葉で入学式は終わり、いよいよ、自分の配属された教室へと向かいます。胸が高鳴るのを抑え、少女は教室までの道のりを軽い足取りで歩いていきました。

初めての教室。

初めての自分の席。

初めての自分の先生。

初めてづくしの船出に少女の気分は更に高揚。席に着いてもその興奮は収まる事無く、辺りをキョロキョロと見渡す少女。

「あつ」

するとどうでしょう。

なんと自分の隣にまるで物語の中の王子様、とまではいかないにしても、いえ、全くもってそんな外見ではないのですけれども、少女の心を射止めるには十分な外見的な優位性を持った男の子が座っているではありませんか。

一瞬で心を奪われた少女は、気づかれないようにちらちらと様子を伺います。先ほどまでとは違う胸の高鳴りを感じながら。

「せっかくなので、まずはお隣の人に挨拶をしましょう。これから先、何年間もいい友達として付き合っていけるよう、細心の注意と敬意を込めて挨拶をしてください」

担任の先生による、自己紹介スタートの合図。お隣の男の子に良

い印象を与えられるよう落ち着く為に、少女は一度深呼吸をしました。そして、その余韻が残っている間に、と、素早く横を向き、自己紹介。

「これからよろしくね。私は小神望。きつと、君よりも人としてのヒエラルキーは圧倒的に上だから、あんまり話しかけてこないでね」
どうしてでしょう。どうしてなのでしょう。

少女の思いとは裏腹に、口から飛び出してきたのはとてつもなく汚い言葉でした。勿論、少女は動揺します。

——え？え？え？

——私、今何を言ったの？あれれ？

素早く回転する脳内。だけど、出てこない答え。動揺は、水面にできた波紋のように一気に広がっていきます。

「ああ、うん。よろしくね。僕は大神真司っていうんだ」

——まだ、大丈夫みたい

——大神君？私の言葉の意味を理解していないみたい

——落ち着いて私

——次はちゃんと挨拶するのよ

再び小さく息を吸い込んだ少女は、ぐっと胸の前で拳を握りました。

「そう、日本語、苦手なのね。このペド野郎」

「うん！まだ平仮名とかちゃんと書けないんだ」

ここで、少女は理解しました。

——暴言が自然に出てきちゃってる

そして、少女は気づきました。

——もしかして、大神君を意識したから？

これまでにない胸の高鳴り。これまでにない自分の失言。これまでにない緊張感。これまでにない心の動き。

そう。少女は少年・大神真司を意識する余り、まともな対応ができなくなってしまったのです。

——どうしようどうしよう

——このまま大神君に暴言吐き続けたら、ばれちゃう
——大神君のこと意識してるってばれちゃう
——それはイヤ、イヤ
——ばれたら死んじゃう、死んじゃうよ
——恥ずかし過ぎるよ
——やだやだやだやだやだやだ
——絶対にばれたくない
——……こうなったら
少年を意識している事をばれたくない。その一心で少女は決意したのです。

少年以外にも暴言を吐くしかない、と。

「ちょ、ちよつと待て、待ってくれ」

望の衝撃的な力ミングアウトを聞いた俺は、理解できるはずもなく、ただただうろたえている。

「つまり、なんだ……望はその、俺への気持ちを誤魔化す為にずっと暴言を吐き続けたってのか？」

下唇を噛み締め、小さく頷く望。視線は俺と合う事無く、地面へと向けられている。

まじかよまじかよまじかよまじかよ。望がずっと俺の事好きだったなんて。いや、その事よりも……。

「お前、それだけの為に、俺を好きって事隠す為だけに、友達、作れなかったんだぞ？そんなの……。そんなの……。」

いいはずがない。いいって言えるはずがない。

「そんな事……じゃない。そんな事じゃない！」

弱弱しく俯いていた望から発せられた力の籠った声。

「私は、私は、真司の事が……。勿論、初めは少し意識する程度だった。でも、でも、気持ちは膨れ上がって……。」

「じゃあ、もつと早く言ってくれば……」

「分かってないわね」

一部始終を大人しく観戦していた可憐がここで再び参戦。

「望はシャイなのよ」

「へ？」

望をちらりと見やると、いやよくよく見ると顔全体を朱色に染め、目はおどおどと四方八方に飛びまくっている。全然、視線を合わそうとしてくれない。

「そ、シャイ。しかも、信じられないくらいにね」

怒りが収まったらしい可憐は腕組みをし、大きく溜め息をついた。
「今の話で分からない？ 望はお兄ちゃんへの気持ちをばれたくないから暴言を吐き続けてきたのよ。しかも、誰彼構わず。どう考えてもシャイじゃない」

「シャイって……」

逆に、誰に対しても暴言を吐き続けてきた望はある意味、鋼の心臓のような気もするが。いやでも、それがまだまじだったのか。俺に対する気持ちがばれてしまうことよりも。

「それに、とことん一途。可憐がいつまでも暴言吐き続けるのは、今さら引つ込みがつかないからって訳じゃないのよ」

「っていうと？」

「鈍感お兄。好き過ぎて未だにまともにお兄ちゃんと話せないのよ、可憐は」

「ま、まじか？」

可憐は恥ずかしさに耐え切れなくなったのか、真っ赤に染まる顔を両手で覆い隠し、その場にへたり込んでしまった。

ああう、ああう、と小さくうめき声らしきものが聞こえてくる。
なんだか、こっちまで恥ずかしくなってしまう。

「あー、でもでも……」

とりあえず、恥ずかしさを紛らわせるように、話題を探す。

「ああー、そうだ。えっと、この前の土曜日、町中で望と……」

その、な、一緒にいた男は、誰なんだ？」

「……………あれは……………従兄弟……………」

両手で顔を覆ったままの望から、くぐもった声が聞こえてきた。
って、従兄弟かよ。従兄弟だったのかよ。何これ？何これ？まじで
恥ずかしい。

俺、凄まじい勘違いしてたじゃん。

あああああああああ—————！！

独りよがりの勘違い万歳。かつてないほど恥ずかしい。…………ん
？でも、考えてもみれば、この勘違いの原因も苛々モヤモヤし始め
た原因も元を辿ればたしか…………。

「そそそそ、そうだ。何で望、あの時、放課後、俺、無視、したん
だ？」

脳内回路が恥ずかしさでショート寸前の俺の口からは単語しか出
てこなかった。純情過ぎて我ながら気持ち悪い。

「だ、だって、だって、もう直ぐ、真司、誕生日、印象、嫌、私、
だから」

俺につられたのかは分からないが、望も片言全開。しかも、意味
が分からない。

「あえ？どういう、こと？」

「ただだ、だから、誕生日、近いから、プレゼント。告白。でも…

…印象、大事…………。暴言、吐く。きつと、駄目」

望が必死に、シャイを押さえ込みながら伝えてくれたこと。

誕生日。

暴言。

駄目。

印象。

そして、告白。

つまりは…………。

「つつつ、つまり、望は俺の誕生日に告白するつもりで、でも、暴
言吐いていると、印象が悪いから、だから、あの時黙って…………」

ここでようやく顔を上げた望。

目に目一杯涙を溜め、唇を噛み締め、震えている。

そして、小さく首を上下。

「あー、なんつうか。本当に、俺もそうだけど、お前もとことんあれだよな」

本当に、お互い、お互いの事知っているようで、全然知らなかったんだな。

知らなさ過ぎだ。

一番近くに居たのに、一番大事な事を知らない。全く。

難儀だ。

俺も。

望も。

そりゃ、可憐も怒るよな。

「あのな、今さらお前の暴言で俺が傷つくわけないだろ？印象なんて悪くなるわけもない。むしろ、俺は、あれだ。望の暴言がないと、その、駄目なんだよ。だから、何も悩まなくいいんだ」

そう、悩まなくていい。

どこにも悩む要素なんてない。

「望は今の望のままでいい。いくら暴言吐かれても、俺は、その、望のことが……好きだ、からさ」

頭を掻き毟ってみても、恥ずかしさは消えない。

それどころか、余計に暴れまわる。

でも、どこか心地いい。

「ああ。真司い」

望はふらふらと立ち上がり、こちらにふらふらと寄ってきた。「これ」

目の前でふらりと止まり、差し出してきたのは、小さな箱。綺麗にラッピングされた箱。目に映る淡いピンク。

赤いリボン。

それを乗せる、望の白い、小さな手。

「誕生日……おめでとう」

そして、笑顔。

どこまでも、その笑顔は、笑顔で、望の笑顔で。

自然な笑顔で。

俺も自然と笑顔になる。

そして、一言。

「ありがとう」

あの恥ずかしすぎる告白劇から数日が過ぎた。

家に帰ってから、可憐に散々罵られ、辱められた事は、記憶の片隅に追いやってしまおう。

一応、いや、一応ではないか。望と俺は晴れて恋人同士になったわけなのだが、わけなんだけれども、未だに望の周囲に対する暴言は止む事無く続いている。

今さら隠す必要も何もないのだろうけど、それは俺がそう思うだけで、十年近くもシャイを貫き通してきた可憐にとってはそう簡単にはいかないらしい。

ちなみに、俺に対しても。

でも、だからと言って、このままでいいとは俺はこれっぽっちも、微かにも思っていない。俺に対しての暴言は別として。

だからこそ、これまで俺の為に失ってきたものを取り戻して、とまではないかないにしても、これから先、失ってしまうものが少しでも少ないように、得られるものが少しでも多いように、俺は望に寄り添っていきたい。

これまで俺を思い続けてきてくれた望に、少しでも、気持ちを返していきたい。

きつと、それが俺にできる精一杯のこと。

と、かつこいい事は言ってみたものの、なかなか人生というものはうまくはいかないわけで。

いや、これは望がそれを望んでいないとかそういうわけじゃない。まだ、望にも言つてないし。うん。

でも、それを拒否するはずはない。

暴言を吐きながらも、きつと喜んでくれるはずだ。

だからこそ、一刻も早く俺は何かしら行動を開始しないとイケないわけなのだが。

わけなのだけれども。

でも、でも、でもな。でもだ。

個人的には、新しく知れた望の一面を、その、何と云うか、皆に簡単に知られたくない自分がいるわけで。

いや、我が侬とは分かっている。

自分勝手だとは百も承知している。

だけど、けども、もう少し。

本当にもう少しだけでいい。

ふと、横を見る。

いつものように俺の横を歩く望。

俺の視線に気づいた望がきつとこちらを睨みつけ、口を開いた。

「何見てんの。私があんたの視線で傷ついたらどうすんのよ」

鼓膜を揺らす、いつもの暴言。

「それはありえねえよ！」

そして、いつも通りの自分のリアクション。

今は違う意味合いを伝えてくる暴言に、心のどこかが心地よく擦られる。

ああ、駄目だよっぱり。

ごめん。望。

もう少し待ってくれ。

待つて欲しい。

本当に、あと少しだけ。

あと少しだけでいいんだ。

俺は、な。

少しでも長く、望の暴言に込められた秘密を、
独り占め………してい
たいんだ。

（後書き）

新人賞に投稿しようと考えて書いたのですが、どうにも読み返してみればありきたりな話すぎて、結局お蔵入りした作品です。
まあ、こんな話が大好きなんですけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8423v/>

僕と君と暴言と

2011年8月20日03時33分発行